

「世紀末」という言葉には退廃的なイメージが伴う場合がある。「新しい芸術」を意味する「アール・ヌーヴォー art nouveau」や、「若い様式」を意味する「ユーゲントシュティル Jugendstil」にさえ、そのような側面がないわけではない。しかし、アール・ヌーヴォーの代表者の一人であり、19世紀末にはベルギーからドイツに移りユーゲントシュティルの代表的デザイナーとなったアンリ・ヴァン・ド・ヴェルド (Henry van de Velde, 1863-1957) の場合、そのような「世紀末」のイメージでは十分に説明できない。1890年代の理論と制作活動における変化とその背景を探ることを通じて、ヴァン・ド・ヴェルドのデザイン実践の特性を明らかにしたい。

ヴァン・ド・ヴェルドは点描主義の画家を経て、1892年に装飾芸術へ向かい、1894年には初めての建築設計を行い、デザイナー・建築家としての活動を始めた。1895年にはサミュエル・ビング (Samuel Bing, 1838-1905) に協力して、パリのギャラリー L'art nouveau の室内設計を担当、1897年には、その室内をドレスデンで行われた美術展で再現展示して注目を集め、ドイツでも活動の範囲を拡大した。

ヴァン・ド・ヴェルドは理論家的側面を兼ね備えたデザイナーであり、1894年頃からは講演活動も行うようになった。同年には *Déblaiement d'art* (「芸術の浄化」) を著し、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900)、ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) に発するイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動の展開とその意義について述べている。また、センチュリー・ギルドなど比較的若いメンバーによる新たな活動などについても詳しく触れている。ヴァン・ド・ヴェルドが1894年に建築設計を行った自邸ブルーメンヴェルフには、モリスのレッド・ハウスに示唆されたと思われる部分があり、ヴァン・ド・ヴェルド夫妻の活動にはモリス夫妻のそれと重なる部分が大いにある。また、1897年にブリュッセルのイクセルに設立した彼の工房は、モリス商会やセンチュリー・ギルドなど、アーツ・アンド・クラフツ運動の工房をモデルとしたと推定されるところが十分にある。

しかしながらヴァン・ド・ヴェルドは、モリスらの思想やアーツ・アンド・クラフツ運動の実践を、そのままブリュッセルで焼き直しただけではなかったし、一部のアール・ヌーヴォーやユーゲントシュティルのデザインに見られるように、自然さと健全性を志向するアーツ・アンド・クラフツの思想と実践に世紀末の陰りを添えるようなものでもなかった。ヴァン・ド・ヴェルドは1898年にブリュッセルの「人民の家」で講演を行い、それは *William Morris: artisan et socialiste* 「ウィリアム・モリス：工芸家・社会主義者」として刊行されたが、この頃からの彼の活動はアーツ・アンド・クラフツ運動の限界を乗り越えようとするものにまでになって行く。ヴァン・ド・ヴェルドはイギリスの運動を評価しながらも、その近代工業・近代社会への消極的な姿勢を批判的に見、自らの工房で作り出す製品には新しい感性を吹き込もうとしていた。